

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

[Research Note] The Concert Arias of W. A. Mozart (1756-1791): nature of the concert aria

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 澄奈, Yamamoto, Sumina メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1172">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1172</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



研究ノート

**W.A. Mozart (1756-1791) のコンサートアリア**  
——コンサートアリアの実態——

山本 澄奈

要旨

本稿は、「モーツァルトのコンサートアリア」について研究するための大前提として、研究対象の範囲を明らかにすることが目的であり、そのために3つの手順を設定した。

- ・ 各種音楽事典を手がかりに、「コンサートアリア」についてどのような記述がなされているかを検討する。
- ・ モーツァルトの「コンサートアリア」について、どのような言説が残されているか、『新モーツァルト全集』の「序文」、およびモーツァルト作品についての各種解説書から読み取る。
- ・ モーツァルト自身にとって「コンサートアリア」がどのような意味を持っていたのかということ、彼に関わる書簡から読み解く。

これらの調査を経て、「コンサートアリア」の実態を明らかにすることが本稿の目的である。

その結果、「コンサートアリア」には2通りに説明することが必要であるとわかった。

- ・ 狭義には特定の歌手がコンサートにおいて演奏するために作られたオーケストラ付きのアリアおよびシェーナ(独立したアリア=実態としてのコンサートアリア)である。
- ・ 広義には作曲の経緯や目的にかかわらず、オーケストラ付きのアリアおよびシェーナがコンサートにおいて演奏されるという状況を意味している(状況としてのコンサートアリア)。

この考察から、たとえオペラの一部として作曲されたアリアであっても、オペラから抜粋され、独立したコンサートアリアとして歌われる可能性があることを今後の研究においても考慮すべきであることが明らかになった。

Research Note

**The Concert Arias of W. A. Mozart (1756-1791):  
nature of the concert aria**

**Sumina YAMAMOTO**

**Abstract**

As the fundamental premise for the research for *The Concert Arias of W. A. Mozart*, this paper considers the definition of the concert aria. The following three procedures have been set as the method:

- Study the entries on the concert aria using various music dictionaries.
- Research the various discourse on Mozart's concert arias by reading the preface of *Neue Mozart-Ausgabe* and other various commentaries on Mozart's works.
- Discern what the concert aria meant to Mozart himself by analyzing accounts of his concert arias in letters concerning Mozart.

The object of this paper is to define, using the above methods, what the concert aria meant to Mozart and to illuminate the state of the concert aria.

In conclusion, it was discovered that two sets of definitions are required to define the concert aria.

Strictly speaking, a concert aria is an aria or scena that was written to be performed in a concert setting by a specific singer with an orchestra. This first definition of the concert aria—an independent, stand-alone aria—defines the concert aria as a substance.

In a broader sense, a concert aria can be described as a situation where an aria or scena, regardless of the composition's original circumstances or purpose, is performed in a concert setting with an orchestra. This second definition of the concert aria defines the concert aria as a situation.

From these observations, it should be borne in mind that an aria, even if it was originally composed as part of an opera, can be excerpted and performed as a stand-alone concert aria.

## 研究ノート

## W.A.Mozart (1756-1791) のコンサートアリア

## ——コンサートアリアの実態——

山本 澄奈

キーワード：モーツァルト コンサートアリア コンサート 演奏会 アリア

## 第1章 はじめに

ウルリヒ・コンラート Ulrich Konrad (1957-) が編纂した『モーツァルト作品目録 Mozart-Werkverzeichnis』「B 舞台作品 Bühnenwerke II オーケストラ伴奏付きアリアとシェーナ Arien und Szenen mit Orchester」(Konrad 2005: 56-69)によると、モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)は 56 曲のコンサートアリア *Konzertarie, Concertaria, Aires de concert* を作曲している<sup>1</sup>。各種コンサート、楽譜出版、CD 録音など演奏の現場においても、モーツァルトの「コンサートアリア」というジャンルは、ある程度の存在感を持って認められていると考えることができる（この点については第3章で具体的に触れる）。

ところが音楽研究の世界に目を向けると、コンサートアリアの認知度は高いとはいえない。例えば国立情報学研究所が提供する「CiNii Articles」によって「アリア」を検索すると 1212 件がヒットするのに対して、「コンサートアリア」を検索してもわずか3件にとどまり、研究対象とされていないということがわかる。長町順史(1968-2017)が指摘するように、「コンサートアリア」というジャンルは非常に曖昧で定義が難しいものであるために、演奏現場と研究との間に大きな落差が生じるのであろう。その結果、様々な音楽事典にも「コンサートアリア」の定義については詳しい記述がなかったと長町は言う（長町 2013: 3）。

このような状況を鑑み、「モーツァルトのコンサートアリア」について研究するための大前提として、研究対象の範囲を明らかにすることが本論文の目的である。

第一段階として各種音楽事典を手がかりに、「コンサートアリア」についてどのような記述がなされているかを検討する。次に、モーツァルトの「コンサートアリア」について、どのような近代の言説が残されているか、『新モーツァルト全集 *Neue Mozart Ausgabe Serie II Bühnenwerke Werkgruppe 7: Arien, Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester*』の「序文 *Zum Vorliegenden Band*」(Kunze 1967) およびモーツァルト作品についての各種解説書から読み取る。そして、モーツァルト自身にとって「コンサートアリア」がどのような意味を持っていたのかということ、彼に関わる書簡から読み解こうと思う。これらの調査を経て、モーツァルトにとって「コンサートアリア」がどのような意味を持っているのか考察し、その実態を明らかにしたいと思う。

<sup>1</sup> 「コンサートアリア」という言葉を、とりあえず「オペラから独立してコンサート等で演奏されるアリア、またはレチタティーヴォとアリア（シェーナ）」という意味で用いることにしたい。56 曲の中ではソプラノ用の 36 曲が最も多い。また、『作品目録』の 70 ページから 71 ページにかけては、同種の二重唱や合唱も収められている。

## 第2章 音楽事典からわかる「コンサートアリア」についての記述

### 第1節 調査方法

「第1章 はじめに」で述べたように、「コンサートアリア」という言葉は明確に定義されていないので、研究するにあたりその意味するところを明確にすることが必要であると考えた。その第一手順として様々な音楽事典を調査し、コンサートアリアについてどのような記述がなされているか調査した。

調査対象は、19世紀以降に各国で出版された音楽事典のうち、東京音楽大学付属図書館に所蔵されている参照可能な35種類とする<sup>2</sup>。このうち、版を重ねている事典の場合、著者および記述内容が同一のものは一種類と数え、版によって著者・記述内容が異なるものは版ごとに一種類と数えた。また、『ニューグローヴ世界音楽大事典』と『新グローヴオペラ事典』は翻訳にあたって補筆が行われている可能性があるため、原書、邦訳それぞれを独立した事典として調査対象に加えた。

これら35種類の事典を用いてコンサートアリアという項目の存在を確認すると同時に、索引によっても「コンサートアリア」を検索し、コンサートアリア以外の様々な項目の中でコンサートアリアに関連する記述がないかを探した。さらに、索引にあげられていなくとも、「アリア」および「コンサート」という項目の中でコンサートアリアに関する記述がないか、各項目を詳しく読むことによって確認している<sup>3</sup>。

### 第2節 調査結果

35種類の事典を調査したところ、「コンサートアリア」という項目を立項している事典は存在しなかった。ただし、東京堂が出版した『音楽辞典』の新版(1970)においては、「アリア」という項目の小見出しとして、「Aria concertata」という言葉が挙げられており、「演奏会用様式に作曲されたオーケストラ付き Aria (小泉 1970: 34)」とされ、明らかにコンサートアリアを指していると思われる(資料1の一覧表ではeのマークを記した)。しかし、『グローヴ音楽事典』初版の「オペラ」の項目において、「アリア・コンチェルタータとは、単に半アリア(半分の性格を持ったアリア)もしくは話すようなアリアと同義である。The Aria concertata was simply an Aria di mezzo carattere, or an Aria parlante (Rockstro: 1878, 511)」と説明されている。つまり、アリアの性格を表す言葉と考えるべきであろう(資料1△)<sup>4</sup>。また、『New Grove 2』ではAriaの項目の小見出しとしてAria concertataが挙げられおり、「アリア・コンチェルタータにおいては、器楽アンサンブルが詩節の中で、歌のフレーズの中に指し込まれ、または歌を伴奏する Arie concertate, in which an instrumental ensemble intervenes between vocal phrases within a strophe or accompanies the voice (Westrup: 2001, 889)」と説明し、協奏曲的なアリアを指していると判断できる(資料1▲)<sup>5</sup>。した

<sup>2</sup> 11 ページに資料1として調査対象音楽事典の一覧表を載せた。なお、音楽事典については直接引用したもの以外、参考文献表に再録することはない。

<sup>3</sup> 検索にあたって、5ヶ国語(日本語=コンサートアリア/演奏会用アリア、英語=Concertaria、独語=Konzertarie、伊語=Concertoaria、仏語=Airs de concert, Concertaria)を用いた(アリアおよびコンサートについても多言語を対象とした)。

<sup>4</sup> Rockstro 1879: 511; Rockstro 1927: 111; Rockstro 1954: 198; Westrup 1980: 575=資料1△

<sup>5</sup> Westrup 1980: 575, Westrup 1993: 282, Westrup 2001: 889=資料1▲。

がって、『音楽辞典』の用語法には問題があるように思われるが、たとえ小見出しではあっても、コンサートアリアに関する記述が見られると言うことは特記すべきことと考える。

### 第3節 調査結果2

上述のように、「コンサートアリア」という項目はいかなる音楽事典にも存在しなかったが、調査した35種類のうち15種類において「アリア」の項目の中で、コンサートアリアに関する記述を見つけることができた。(資料1○マーク)。加えて、『New Grove 2』においては「Concert」の項目の中で、コンサートアリアに関わる記述が行われている(Weber 2001: 225)(資料1●)。さらに『カラー図解音楽事典』(Michels 1977: 493)では、20世紀に関する項目の中で、ベルク Alban Maria Johannes Berg (1885-1935)の作品例としてコンサートアリアが紹介されている(資料1☆)<sup>6</sup>。

上述のアリアの項目の中で、7種類の事典では、まさにコンサートアリアまたはそれに相当する言葉が用いられている(資料1◎)<sup>7</sup>。一方、コンサートアリアという言葉を用いていなくとも、記述内容からコンサートアリア(独立して演奏されるアリア)を指していると読み取れる場合もある。コンサートアリアについて述べていると見なしうる記述(7種類)を以下の表に示す。

bestehendes Musikstück 独立して存在する音楽作品	『Encyclopädie-Schilling』(Nauenburg 1835: 261) (資料1 a)
autonomes Gebilde 自立作品	『MGG』(Gerber 1949: 613) (資料1 b)
独立した曲	『音楽辞典』(津川 1965: I 57) 『ニューグローヴ世界音楽大事典』(Westrup 1993: 280) (資料1 c)
独立した声楽曲/独立したアリア	『標準音楽辞典』(渡辺 1966: 34~35) (資料1 d)
selbständiges Konzertstück 独立した演奏会用作品	『Das grosse Lexikon der Musik』(Verchaly 1978:100) (資料1 f)
Independent part 独立した部分	『New Grove』(Westrup 1980: 573) 『The New Grove Dictionary of Opera』(Westrup 1992: 169) 『New Grove 2』(Westrup 2001:887) (資料1 g)

これに対して、『標準音楽辞典』においては、「音楽会またはオペラのアンコール用としてそれだけがとり出して歌われる」(渡辺 1966: 35)という記述がある(資料1 d)。つまり、作品としてのコンサートアリアについてではなく、「用途」という面から説明している。同様に、『New Grove 2』においては、「プログラムの前後半それぞれ、序曲、アリア、器楽独奏曲、最後にオペラやオラトリオのいずれかから、声楽または合唱のフィナーレが演奏されていた Programmes: each half of the programme would offer an overture, an aria, a solo

<sup>6</sup> [ベルク] ソプラノと管弦楽のための演奏会用アリア『ぶどう酒』(1929, ボードレール/ゲオルゲ詞)(Michels 1977: 493)。

<sup>7</sup> 『MGG』では“Konzertarie”、『Encyclopädie-Schilling』では“Konzert-Arie”、『標準音楽辞典』(新訂含む)では「演奏会アリア (concert aria)」、『カラー図解音楽辞典』・『音楽中辞典』(新訂含む)・『音楽小辞典』は「演奏会用アリア」となっている。

instrumental number and finally a vocal or choral finale, either from opera or oratorio. (Weber 2001: 225)」とされており、「アリアが独立してコンサートで演奏されている」という「状況」が判る(資料1i)。また、『オックスフォードオペラ大事典』には、「アリアをほかのオペラに移し変えることも可能で… [中略] …、別の作曲家の作品に移し替えることすらあった(著者不明 1996: 27)」という記述が見られ、いわゆる「代替アリア」のことを説明している(資料1h)。「代替アリア」はオペラの中で演奏されるので、「演奏会で独立して歌われる」とは多少意味合いが異なるが、後に述べるように「代替アリア」をコンサートアリアの一種とみなす考え方もあるので、今回はコンサートアリアに関連する記述に含めた<sup>8</sup>。

#### 第4節 調査から見た考察

「アリア」の項目内でコンサートアリアに関する記述を行っていると考えられる15種の事典ではその大部分が「独立した(単独)楽曲」であるという記述を行っていた。これらはどのように作られたかという作曲の概念から説明しており、「アリアが独立して作曲される」ということ、つまり「実体としてのコンサートアリア」について述べていると考えることができる。具体的には、「単独」、「独立」、「自立」といった言葉で説明されていた。

また少数だが、「アリアが演奏会で演奏される」という記述、つまりコンサートアリアの演奏方法という「状況としてのコンサートアリア」について述べた記述もあった。『New Grove 2』や『標準音楽辞典』では、「実体」と「状況」の両方の記述を含んでいる。一方、『オックスフォードオペラ大事典』では「代替アリア」に言及しており、「状況としてのアリア」にかなり近い内容であると考えられる。

以上見てきたように、いずれの事典にも「コンサートアリア」という項目は立てられていないが、2分の1弱の事典にコンサーアリアに関わる記述があった。その記述の大部分が、「独立して作曲する」という「実体としてのコンサートアリア」(狭義のコンサートアリア)についてのものではあったが、少数ながらアリアをコンサートで演奏するという「状況としてのコンサートアリア」(広義のコンサートアリア)について述べたものもあった。また、“Encyclopädie der gesamten musikalischen Wissenschaften”のように19世紀初頭に出版された音楽事典という早い例もあるが、コンサートアリアに触れている音楽事典の多くは20世紀後半のもであった。

### 第3章 コンサートアリアの分類方法について

前項で見たように、「コンサートアリア」という言葉には必ずしも明確な定義がされているわけではない。しかし、「実体としてのコンサートアリア」(ジャンルとしてのコンサートアリア)と演奏機会に関わる「状況としてのコンサートアリア」の両者を含んでいることが判った。そこで第2の手順として、楽譜の出版状況やモーツァルトに関わる様々な解説書における扱い、CDへの収録状況から、どのような種類の音楽が「コンサートアリア」の名で総称されているのかを検討する。

<sup>8</sup> コンラートの『作品目録』(Konrad 2005)においてもクンツェの『新モーツァルト全集』(Kunze 1967-72)においても、いずれも「代替/挿入アリア」を「コンサートアリア群」の中に数えている。

様々なモーツァルトの声楽出版楽譜の中に、「コンサートアリア」と総称するものは数種類存在する。例えば、リリー・レーマン Lilli Lehmann (1848 - 1929)が編集した『コンサートアリア集 *Konzert-Arien: für eine Singstimme mit Orchester*』(Leipzig: C.F. Peters, 1921)、フランツ・バイヤー Franz Beyer (1922 - ?)の編集による『ソプラノのためのコンサートアリア集 *Konzert-Arien für Sopran und Orchester*』(Leipzig u.a.: Breitkopf & Härtel, 1999)、トーマス・ゼードルフ Thomas Seedorf (? - ?)の編集による『ソプラノのためのコンサートアリア集 *Konzertarien für Sopran*』(Kassel u.a.: Bärenreiter, 2013)などを挙げるができるであろう。あるいは録音物としても、キリ・テ・カナワ Te Kanawa, Kiri (1944-)が歌う『モーツァルト：ソプラノ・コンサート・アリア集 *Concert arias = Konzertarien = Aires de concert / Mozart*』(ポリドール 1984, London: 411 713-2 (F35L-50133))、ナタリー・デセイ Dessay, Nathalie (1965-)が歌う『コンサート・アリア集 *Airs de concert / Mozart*』(EMI Music Japan 2009, EMI Classics TOCE-14273)を例とすることができるであろう。これらの出版物にはいずれにも、各国語によって「コンサートアリア」と明記されている。つまり、「コンサートアリア」という言葉は、演奏の現場においてはそれなりの認知度があると考えられることができる。<sup>9</sup>

### 第1節 新全集校訂報告の調査

ところが、現代においてモーツァルトに関する最も信頼できる楽譜と考えられている『新モーツァルト全集』では、当該の巻は『コンサートアリア集』と記されていない。

『新モーツァルト全集』では、「第IIシリーズ：劇音楽」の中で、全体の7番目のグループとしてコンサートアリア 66曲<sup>10</sup>が「オーケストラ伴奏付きのアリア、シェーナ、アンサンブルと合唱」と題して4分冊にまとめられており (*Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenwerke Werkgruppe 7: Arien, Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester*)、曲集の題名としては「コンサートアリア」という言葉を用いていない。そこで、同巻の校訂者クンツェ Stefan Kunze (1933 - 1992)による「序文 *Zum vorliegenden Band - Bestimmung und Gruppierung der Kompositionen* (Kunze 1967: VII)」を検討し、クンツェがコンサートアリアというジャンルをどの様に捉えているのか探っていきたい<sup>11</sup>。

クンツェは序文である「定義と分類 *Bestimmung und Gruppierung der Kompositionen*」の冒頭において、この巻に収められた楽曲の用途が広範囲に渡ることから「それらは成立の観点だけではなく、用途の観点についても様々である *Sie unterscheiden sich nicht nur hinsichtlich ihrer Entstehungsanlässe, sondern auch in ihrer Bestimmung.* (Kunze 1967: VII)」とその定義に関して明確な言及を避けている。たしかにこの巻には、「リチェンツァ *Licenza*」、他人のオペラに差し替え又は挿入された楽曲、他人ではなくモーツァルト自身のオペラに差し替え又は挿入した楽曲、そして特定の歌手の演奏を想定して作曲された「独立したア

<sup>9</sup> しかし現在出版されている楽譜やCDの場合、オペラアリアとコンサートアリアがしばしば混在している。例えば、Bärenreiter社の楽譜『アリア集 *Das Arienbuch*』(Schelhaas 1999)、ルネ・フレミングのCD『モーツァルトアリア集 *Mozart arias*』(Fleming 1996)などが挙げられる。

<sup>10</sup> コンラートの作品目録(Konrad 2005)と新全集にまとめられている曲数に多少異なりがある。

<sup>11</sup> 『ケツヒェル目録 *Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts*』(Giegling u.a. 1964)第6版においてもLXXIXページ以降でジャンル分をおこなっており、クンツェと同様に「劇音楽」の下位分類、全体の7番目のグループとしてコンサートアリアを配置している(Giegling u.a. 1964: LXXXIX-LCIV)。

リア」など、多種多様な楽曲が含まれている<sup>12</sup>。クンツェでなくとも、明確に定義をすることは難しいであろう。

クンツェはコンサートアリアという概念が含む要素を明確に定義・分類しているわけではないが、この巻に集められている楽曲について次のように示している。「新モーツァルト全集に収められた曲の中で最も多いのは、モーツァルトの友人歌手のために他のオペラへの挿入として、または独立したアリアやシェーナとして作曲したもので、最後にあげたもの（独立したアリア）だけが本来の意味で、『コンサートアリア』と呼ばれる。なぜなら、舞台上演は始めから想定されていないからであり、また演奏会形式という特別な方法によって、その演劇的性格が示されるからである(Kunze. 1967, VII)<sup>13</sup>。」

クンツェは明確な分類はしていないが、大きく I 独立した作品、II 他の作品に挿入した作品の2つに分類し、その上で作品の性格に基づいて「誰のため」という目的別に、①友人（モーツァルトの友人歌手のため）、②貴族（リチェンツァ）、③アマチュア（愛好家のため）、④自分（作曲の試み）という4つのグループに分けている。

## 第2節 様々な解説書に見られるコンサートアリアの定義と分類

クンツェは作曲の目的と経緯、演奏の機会に基づいて『新モーツァルト全集』掲載曲を分類したわけであるが、同じような分類法はモーツァルト作品についての様々な解説書にも見られる。次の手順として、それらについても確認をしておこう。

ニール・ザスロー Neal Zaslaw(1939-)は『モーツァルト全作品事典』において、コンサートアリアを「オペラの一部として作曲されたのではなく、オペラとは異なって互いに無関係な楽曲から成り立つ演奏会の1つの曲目をなすものとして書かれたアリア（ザスロー 2006: 102）」と定義しながらも、それに続いて、「コンサート・アリアとその他のアリアとの境界が曖昧（ザスロー 2006: 102）」であるために、広い意味でのコンサートアリアには狭義でのコンサートアリアとは異なる幾つかのタイプが含まれているとしている。彼は広義でのコンサートアリアを6つに分類した。

<sup>12</sup> リチェンツァとは、貴族を讃える内容を持った機会音楽で、1766年にザルツブルク大司教ジギスムント・フォン・シュラッテンバッハ Sigismund Christoph Graf von Schrattenbach (1698 - 1771)の榮譽を称えて作曲したレチタティーヴォとアリア《務めが私を強いる今こそ。ジギスムントの功績はかくも偉大にして Or che il dover - Tali e cotanti sono》K36(33i)がその例であろう。他作への代替としては B.ガルツピ Baldassare Galuppi (1706 - 1785)のオペラ・ブッフア《ドリンダの結婚 Le nozze di Dorinda》(1755 ボローニャ初演)の挿入アリアとして作曲されたと思われる〈あなたは今は忠実ね Voi avete un cor fedele〉K217が、自作オペラの代替としては《フィガロの結婚 Le nozze di Figaro》K492を1789年7月ウィーンに再演するにあたって、スザンナのアリア〈とうとうその時が来たわ Ginse Alfin il Momento〉(第4幕第28曲)の「差し替えアリア」としてアドリアーナ・ガブエーリ Francesca Adriana Gabrieli (1730 - 1796)のために作曲されたロンド〈君の愛する人の願いに Al desio, di chi t'adora〉K577が挙げられる。そして独立の例はアロイジア・ヴェーバー Aloysia Weber(1760?-1839)のために作曲されたレチタティーヴォとアリア《アルカンドロよ、私はそれを告白する～私は知らぬ、どこからこの愛情が来るのか Arcandro, lo confesso. Non so d'onde viene》K294とすることができるだろう。

<sup>13</sup> Die weitaus umfangreichste Gruppe bilden diejenigen Kompositionen, die Mozart für befreundete Sänger und Sängerinnen schrieb, entweder als Einlagen in fremde Opern oder als selbständige Arien bzw. Szenen. Nur die letztgenannten sind im eigentlichen Sinn als Konzertarien zu bezeichnen, weil sie ohne Aus nahme von vorneherein nicht für die Bühne gedacht sind und ihr dramatischer Gehalt in besonderer Weise durch konzertantes Gefüge eingefangen wird.

- ① 「真の」コンサート・アリア：モーツァルトがお気に入りの歌手のためにしばしば書いたもので、作曲者本人や歌手が主催する演奏会で歌われた。
- ② 挿入アリア：ある登場人物の役割を拡張するために他人のオペラに加えられるもので、新たな歌詞に作曲される。
- ③ 代替アリア：モーツァルト自身や他人のオペラで、元来もアリアが歌われていたところに、多くはその歌詞を再び用いて、新たに作曲して置きかえたもの。
- ④ 家庭音楽のアリア：家庭で友人たちと楽しむためのアリア。
- ⑤ 国家の公式行事のためのアリア（リチェンツァ）：富と権力のあるパトロンを尊敬する歌詞に曲付けされたもの。
- ⑥ 習作としてのアリア：そのほとんどが、シリアスなオペラの台本作者として当時の音楽界を支配していたピエトロ・メタスタージョの歌詞に作曲されている。

(ザスロー 2006: 102)

この6分類を整理するとⅠ演奏会のため(①、⑤)、Ⅱオペラのため(②、③)、Ⅲその他(④、⑥)ということになる。

いっぽうデイヴィッド・ハンフリーズ(原綴り・生没年不明)は、『モーツァルト大事典』において作品群のジャンル名にはコンサートアリアという言葉を用いず、「歌とオーケストラのための作品」としている。そして、大きく「代替／挿入アリア」と「コンサートアリア」に分類し、その上で「コンサートアリア」を①プロ歌手のため、②アマチュア歌手のため、③幼少時の習作、④リチェンツァに分けている(ハンフリーズ 1996: 245)。

ザスローとハンフリーズの分類はクンツェが示しているものとほぼ同じであるといえるが、クンツェが大きく2つに分けているのに対して、ザスローは「その他」という項目を設けて3分類していると考えられる。また、ザスローは代替と挿入を区別しているが、クンツェとハンフリーズは合わせて1つの項目としている。そして、ザスローとハンフリーズは代替と挿入が他人のオペラに対してなのか、自身のオペラに対してなのかを区別していないが、クンツェは対象となるオペラの作曲者によって区別している。

これに対して、小学館出版による『モーツァルト全集』の解説において、吉田泰輔(1940-)は『「コンサート・アリア」なるカテゴリーそのものが、怪しげで疑わしく便宜的なもの(吉田 1993: 168)』であるとし、「両者(狭義のコンサートアリアとオペラ由来のアリア: 筆者補足)の間には、成立の由来以外に殆ど何ら区別する根拠を見いだすことはできないのである。…[中略]…両者の類似性あるいは区別の根拠等に深入りすることは少しも生産的ではない(吉田 1993: 168)」と述べ、定義および分類を放棄している。現在出版されている楽譜やCDを見ても、オペラアリアとコンサートアリアが混在している例がしばしば見受けられる<sup>14</sup>。しかし、この論考から本稿にとって有効な知見を得ることができる。すなわち吉田は狭義のコンサートアリアに対峙するものとして、「たまたまその地の劇場で上演されたオペラのヒット曲を取り出して、一夜の演目の中に押し込めること(吉田 1993: 168)」を挙げている。つまり、これまでに指摘されていたコンサートアリアは、たとえ代替アリアであっても、いずれもオペラとは別の成立由来を持っているものであったのに対し、吉

<sup>14</sup> 5ページ注9を参照のこと。

田はオペラの一部として作曲され、オペラと同じ成立由来を持ちながらもオペラから抜き出され、独立した楽曲として演奏されるという可能性を指摘しているのである。

### 第3節 解説書から得た考察

第2章、第3章から、コンサートアリアには狭義（実体としてのコンサートアリア）と広義（状況としてのコンサートアリア）の考え方がることがわかる。

狭義のコンサートアリアには①プロ歌手のため、②リチェンツァ、③アマチュア歌手のため、④幼少時の習作が含まれる。この内、①と②は演奏会と直接関わるのでザスローのいう「I演奏会のため」に含まれ、③と④は「IIIその他」に当てはまる。いっぽう広義のコンサートアリアには⑤自作のための差し替え／挿入アリアと⑥他人のオペラのための差し替え／挿入アリアが含まれる。しかし、これまでの論者たちはこれら「実体」と「状況」を区別していなかった。

そして吉田に従い、⑦元のオペラとは関係なく独立してコンサートで演奏されたものも最広義のコンサートアリアに加えることができるであろう（以下コンサートアリアの分類として①～⑦の番号を用いる）。

## 第4章 モーツァルトの手紙からみるコンサートアリアの実践

第3章で見たように、本来はオペラの一部として作られたものではあっても、元のオペラから抜き出され、独立した楽曲としてコンサートにおいて歌われる場合もある（⑦）。当時の演奏実践を考えると、これもコンサートアリアを構成する要素に加えることができるだろう。ただし、第3章で検討したのは、モーツァルトの没後に彼のコンサートアリアをどのように捉えてきたかという点であり、モーツァルトその人に関わる考え方ではない。第4章では、モーツァルト周辺で交換された手紙を読み解くことによって、モーツァルトとその周辺の人々がコンサートアリアについてどの様に考えていたのか、とくに「抜粋」⑦を中心にコンサートアリアの演奏実践について明らかにしたいと考える。

### 第1節 調査方法と目的

モーツァルト周辺で交換された手紙から、第3章までで検討してきたコンサートアリアに関わる演奏記録を抜き出した<sup>15</sup>。抽出に当たって資料としたのは、白水社の出版による『モーツァルト書簡全集』（海老澤、高橋 1976-2001）である。抜粋するにあたり、曲目が明確で、日付、演奏場所が推定できるということを条件とした。『モーツァルト書簡全集』を翻訳するにあたって、海老沢敏(1931-)が詳細な解説を付け加えており、その解説を通して、例えばナンネルを始めとする関係者の日記や宮廷記録などの資料を知ることができる。そこで、それらの資料からも演奏会情報を抜粋した（資料2の No.の欄では、書簡本体については同書簡集の番号を示し、補助資料から得た情報には+のマークをつけた）。

この調査によって、モーツァルトの生涯においてどのような種類の曲がコンサートアリアとして演奏されたのかを調査し（第3章で示した①～⑦の分類を曲目欄に書き込んでいく）、中でも、オペラからの抜粋曲⑦がどの程度演奏されたのかに注目した。なお、演奏会

<sup>15</sup> 13 ページの演奏記録一覧を参照願いたい。

の日付が不明な場合、手紙の日付を採用した (資料2 \*1)。

## 第2節 概要

モーツァルトの35年間の人生において、1764年11月24日(8歳)にロンドンで開かれたコンサートから、1791年4月17日のウィーンにおけるコンサートまで、全33回の演奏記録を書簡の調査から集めることができた。開催された都市別に整理すると、ウィーンが圧倒的に多く(18回)、マンハイム(4回)、ザルツブルク(3回)と続き、他にミラノ、ローマ(各2回) ロンドン、ミュンヘン、フランクフルト a.M. (各1回)、開催地不明(1回)という結果であった。ほとんどは、モーツァルトの居住地か旅行先であり、モーツァルト自身が出演したものであるが、1789年9月6日と13日のローマにおけるコンサートだけは例外であり、モーツァルト不在の地で開催されている。

いっぽう、年代別に整理するとウィーン定住以降(成年時代)が21回と最も多く(本拠地ウィーンにおけるものが17回)、少年時代(2回目のパリ旅行以前=4回)と青年時代(ザルツブルク時代=8回)の場合はおもに旅行先で開催されていることがわかった。

ここで明らかになった演奏記録は、あくまでも書簡などから読み取れるものに限られ、実際に開かれた演奏会を網羅しているものではない。それでも、当時の演奏状況の一面が見られるということではできよう。

これら全33回の演奏記録から、人気曲が推測できる。もっとも演奏回数が多かったのは、モーツァルトが大変気に入っていたソプラノ歌手アロイジアのために書いた、レチタティーヴォとアリア《アルカンドロよ、私はそれを告白する～私は知らぬ、どこからこの愛情が来るのか Arcandro, lo confesso. Non so d'onde viene》K294で、1778年3月12日のマンハイムにおけるコンサートをはじめとして計4回歌われている。カストラート歌手フランチェスコ・チェッカレッリ Francesco Ceccarelli (1752-1814)が1781年4月8日に歌うために作曲された《この胸にさあいらっしやい…天があなたを私に返して下さる A questo seno deh vieni…Or che il cielo a me ti rende》K374も人気があり、3回演奏されている。ほかに3回の演奏機会があったのは、オペラ《ルーチョ・シッラ Lucio Silla》K135より〈私は行く。けれどこの胸は張り裂ける Parto, m'affretto〉(1778年1月23日、マンハイムほか)、アリア《いいえ、あなたには出来ません No, che non sei capace》K419(1783年6月21日、ウィーンほか)、ドイツ軍歌《われはカイザーたらん Ich möchte wohl den Kaiser sein》K539(1788年3月7日ほか)、アリア《私は行く、でもどこへ Vado, ma dove?》K583(1789年9月6日、ローマほか)であった。以上の中で《アルカンドロよ》K294、〈この胸にさあいらっしやい〉K374、〈私は行く。けれどこの胸は張り裂ける〉K135はザルツブルク時代(青年期)とウィーン時代にわたって演奏されている。

これ以外に、歌劇《イドメネオ Idomeneo》K366からの抜粋が1782年と83年の3月にウィーンで演奏されているほか、86年3月にも同歌劇のための代替2重唱〈私には言えません Duet for soprano and tenor "Spiegarti non poss'lo〉K489、劇唱と Rond 〈もういいの、私は全てを聞いた～恐れなくて、愛する人よ Non più. Tutto ascoltai. Non temer, amato bene〉K490が演奏されており、この歌劇も人気が高かったということがわかる。

しかし、33回の演奏会で取り上げられた曲の総数を数えると29曲に過ぎず、演奏されていたのは比較的限られた曲であった。

### 第3節 演奏曲種

ここで第3章までで検討してきた広義のコンサートアリアを構成する曲種(①～⑦)という観点から、演奏記録を分析することにしよう。

最も多かったのは①狭義のコンサートアリア(専門歌手のため=12曲、14回)であり、前述の人気曲第1位、第2位がこの種別に含まれる。アロイジアのために作曲した《わが憧れの希望よ。ああ、あなたはいかなる苦しみか知らない Mia speranza adorata. Ah, non sai qual pena》K416も、2回の演奏機会を得ている。

次に多かったのが⑥他人のオペラへの代替/挿入曲(6曲、9回)であった。その多くは、当時の人気作曲家であったパスクワレ・アンフォッシ Pasquale Anfossi (1727-1797=5回)とマルティン・イ・ソレル Vicente Martin y Soler (1754-1806=4回)のオペラのためのものであった。幼少期の《行け、怒りにかられて Va, dal furor portata》K21=K<sup>6</sup>19cを除くと、いずれも1783年以降に演奏されている。

彼自身のオペラからの抜粋(⑦=5曲、6回)はいずれも《イドメネオ》以前の作品を対象とし、《ルーチョ・シッラ》K135(3回)、《偽の女庭師 La finta giardiniera》K196、《牧人の王 Il re pastre》K208、《ツァイーデ Zaide》K344=K<sup>6</sup>336bが演奏されている。

それに対して、⑤自作オペラへの代替/挿入(3回)はいずれも《イドメネオ》以降の作品を対象としている(《イドメネオ》、《フィガロの結婚 Le nozze di Figaro》K577、《ドン・ジョヴァンニ Don Giovanni》K<sup>6</sup>540a-c)。また、⑦抜粋が1783年以前に限られるのに対し、⑤自作への代替/挿入は1786年以降に行われている。

ほかに②リチェンツァの演奏機会は3回(《務めが私を強いる今こそ〜ジギスメントの事蹟はかくも偉大にして Or che il dover-Tali e cotanti sono》K36=K<sup>6</sup>33i=1766年、《われはカイザーたらん》K539=1788年/2回)あったが、③アマチュアのための作品と④幼少期の習作については、演奏記録を確認することができなかった。

以上、『書簡集』の分析から、モーツァルトの周辺においてコンサートアリアという作品群がどの様に演奏されていたかということはある程度は明らかにできたように思う。

### 第5章 結論

これまでに行ってきた事典記述、『新モーツァルト全集』序文、幾つかのモーツァルト解説書、モーツァルト周辺の書簡の検討によって、コンサートアリアを巡る諸状況を明らかにすることができたと考える。そこで本稿の最後に、筆者がコンサートアリアというジャンルをどうとらえるかということをも明らかにしたいと思う。

コンサートアリアは2通りに説明することができる。

1つ目は、狭義の「コンサートアリア」(実体としてのコンサートアリア)であり、ある特定の歌手がコンサートにおいて演奏するために作られたオーケストラ付きのアリアおよびシェーナ(①独立したアリア)のことである。例えば、アロイジアのために書かれた《アルカンドロよ、私はそれを告白する》K294が挙げられる。

2つ目は広義の「コンサートアリア」(状況としてのコンサートアリア)である。これは作曲の経緯や目的にかかわらず、オーケストラ付きのアリアおよびシェーナがコンサートにおいて演奏されるという状況を意味している。つまり、第3章であげた①～⑦までの

要素すべてを含んでいる。

従来の言説においては、⑦オペラアリアから抜粋された曲が見落とされがちであった。しかし、書簡を検討することによりモーツァルトの時代においても、①独立したアリアと⑦オペラからの抜粋曲が区別なく演奏されていたことがわかる。むしろ、⑦抜粋曲と⑤自作への代替／挿入曲を区別することこそおかしいのではないだろうか。⑥他作への代替／挿入曲ならば、モーツァルトの作品群の中に本体となるべきオペラ作品が存在しないのであるから、①独立したアリアと並べることも仕方がないであろう。しかし、⑤自作への代替／挿入曲の場合は、本体となるオペラ作品が存在するわけであるから、そこに所属させることもできるはずである。それにもかかわらず、⑤自作への代替／挿入曲をコンサートアリアのグループに入れるのなら、⑦抜粋曲であってもコンサートアリアとして扱われる可能性を考慮すべきであろう。このように考え、⑦抜粋曲を含めて考えるべきであるとした。ただし、モーツァルトの全てのオペラアリアを対象とするのではなく、あくまでも、モーツァルトの時代に抜粋されてコンサートにおいて演奏されたという記録がある曲に限るということをお断りしておきたい。

本稿の課題は、モーツァルトのコンサートアリアについて研究するための大前提として、研究対象の範囲を明らかにすることが目的であった。そのために、「コンサートアリア」という言葉が何を意味しているのか、どのように使われてきたのかということについて考察しその実態を明らかにした。これにより、研究の基礎を開くという目的は一応果たされたと考えている。今後は、モーツァルトにとってのコンサートアリアを楽譜から読み解き、分析によってその意義と特色を明らかにしていきたい。

#### <資料1 調査対象音楽事典一覧>

##### 凡例

- ◎ : 「コンサートアリア」の関連語を使用している事典
- : アリアの項目でコンサートアリアに関する記述がある事典
- : コンサートの項目でコンサートアリアに関する記述がある事典
- ☆ : 曲例として「コンサートアリア」に触れている事典
- × : コンサートアリアに関する記述がない事典
- △ : アリア・コンチェルタータ（語るアリア）に触れている事典
- ▲ : アリア・コンチェルタータ（協奏的アリア）に触れている事典
- a～h : 本文中の記号と対応している

事典名	出版情報	記号
Encyclopädie der gesammten musikalischen Wissenschaften, oder Universallexion der Tonkunst	Gustav Schilling 1835-38, Stuttgart Rep. 1974, Hildesheim u.a.: Georg Olms	◎ ○ a
Grove's Dictionary of music and musicians (1st.)	George Grove 1878-90, London: Macmillan Rep. 1990, Tokyo: Yushodo	△
Grove's Dictionary of music and musicians (3rd.)	H.C.Colles 1927, London: Macmillan	△
音楽辞典	小泉洽 1948, 東京: 東京堂出版	×
音楽辞典	諸井三郎 1949, 東京: 河出書房	×
Die Musik in Geschichte und Gegenwart (MGG)	Friedrich Blume 1949-86, Kassel u.a.: Bärenreiter	◎ ○ b
Groves Dictionary of music and musicians (5th.)	Eric Blom 1954, London: Macmillan	△
音楽辞典 楽語	堀内敬三 1954, 東京: 音楽之友社	×

学生の音楽事典	堀内敬三 1957, 東京: 音楽之友社	×
歌劇大事典	大田黒元雄 1962, 東京: 音楽之友社.	×
Enciclopedia della Musica	um 1963, Milano: Ricordi	×
岩波小辞典 音楽(第2版)	山根銀二 1965, 東京: 岩波書店	×
音楽事典	下中邦彦 1965, 東京: 平凡社	○ c
標準音楽辞典	目黒三策 1966, 東京: 音楽之友社 (1991, 2008)	◎ ○ d
音楽小辞典	目黒三策 1966, 東京: 音楽之友社	×
新版 音楽辞典	小泉洽 1970, 東京: 東京堂出版	○ e
Brockhaus Riemann Musiklexikon	Carl Dahlhaus; Hans Heinrich Eggebrecht 1978, Wiesbaden: F.A.Brockhaus	×
新編 学生の音楽事典	浅香淳 1978, 東京: 音楽之友社	×
Das Grosse Lexikon der Musik	Marc Honegger und Günther Massenkeil, um 1978, Freiburg i. Br. u.a.: Herder	○ f
音楽中辞典	浅香淳 1979, 東京: 音楽之友社	◎ ○
The New Grove Dictionary of Music and Musicians (New Grove 初版)	Stanley Sadie 1980, London: Macmillan	○ △ ▲ g
音楽大事典	岸辺成雄 1981, 東京: 平凡社	×
Larousse de la musique	Antonie Golèa; Marc Vignal, um 1982, Paris: Librairie Larousse	×
Dizionario enciclopedico universal della musica e dei musicisti (Il Lesscico)	Alberto Basso 1983-84: Torino: UTET	×
カラー図解音楽事典 dtv-Atlas zur Musik	角倉一朗 1989, 東京: 白水社 U.Michels 1977, München: Deutscher Taschenbuch Verlag	◎ ☆
Brockhaus Riemann Musiklexikon	Carl Dahlhaus, Hans Heinrich Eggebrecht, um 1989, Mainz u.a.: Schott	×
ラルース世界音楽事典	遠山一行; 海老沢敏 1989, 東京: 福武書店	×
The New Grove dictionary of opera	Stanley Sadie 1992, London Macmillan	○ g
ニューグローヴ世界音楽大事典	柴田南雄; 遠山一行 1993, 東京: 講談社	○ c
Die Musik in Geschichte und Gegenwart (MGG 2)	Ludwig Finscher 1994-2008, Kassel u.a.: Bärenreiter	○
オックスフォードオペラ大事典 The Oxford dictionary of opera	大崎滋生; 西原稔 1996, 東京: 平凡社 J.Warrack; E.West 1992, Oxford: Oxford University Press	○ h
The New Grove Dictionary of Music and Musicians Second edition (New Grove 2)	Stanley Sadie 2001, London: Macmillan	○ ● ▲ g i
新編 音楽中辞典	海老沢敏 2002, 東京: 音楽之友社	◎ ○
新編 音楽小辞典	金沢正剛 2004, 東京: 音楽之友社	◎ ○
新グローヴオペラ事典 The New Grove Book of Operas	中矢一義; 土田英三郎 2006, 東京: 白水社. Stanley Sadie 1992, London Macmillan	×

## 〈資料2 演奏記録一覧〉

①専門歌手のため、②=リツェンツァ、③=家庭の楽しみ、④=習作、⑤=代替挿入(自作)、⑥=代替挿入(他作)、⑦=オペラ抜粋、No.=書簡番号、+=補助資料による情報、\*1=手紙の日付、\*2=書簡集 p. 450

日付	演奏場所	曲目(K番号) 曲種	No.	日付	演奏場所	曲目(K番号) 曲種	No.
1764/11/24	London	K21=K619c⑥+	43	1783/3/29	Wien	K366⑦	520
1766/12/21	Wien	K36=K633i②+	80	*1		K369①	
1770/3/12	Milano	K78=K673b①+ K88=K673c①+ K79=K673d①+ K77=K673e①+ K anh.2 =K674A①+	98			K135⑦	
						K416①	
				1783/6/21	Wien	K418⑥+	529
				*1		K419⑥+	
		K420⑥					
1773/1/17	Milano	K165=K6158a①+	189	1783/6/30	Wien	K418⑥	530
						K419⑥	
1778/1/23	Mannheim	K135⑦	306	1783/12/22	Wien	K431=K6425b①+	538
1778/2/13	Mannheim	K135⑦	311	1783/12/23	Wien	K431=K6425b①+	538
1778/3/12	Mannheim	K208⑦	326	1786/3/13	Wien	K489⑤+	626
		K294①					
1778/7	Mannheim	K294①+	347	1788/3/7?	Wien	K539②+	*2
		K272①+			1788/3/12?	不明	K539②+
1778/11/22	München	K294①+	371	1788/5/7	Wien	K6540a-c⑤+	*2
1780/3/18	Salzburg?	K196⑦+	385	1788/6/2	Wien	K541a⑥+	*2
		K344=K6336b⑦+			1789/8/29	Wien	K577⑤+
1781/4/8	Salzburg	K374①	442	1789/9/6	Roma?	K583⑥+	704
1781/4/27	Salzburg	K374①	442	1789/9/13	Roma?	K583⑥+	704
1782/3/3	Wien	K366⑦	477	1789/11/9	Wien	K583⑥+	704
1782/5/26	Wien	K369①+	485	1790/10/15	Frankfurt a.M.	K374?①+	254
1783/1/11	Wien	K416①	514	1791/4/16	Wien	K419⑥+	529
1783/3/11	Wien	K294①	519	1791/4/17	Wien	K419⑥+	529

## 参考文献

海老沢敏；高橋英郎編

1976-2001 『モーツァルト書簡全集』 東京：白水社。

Gerber, Rudolf

1949 „Arie“ „Die Musik in Geschichte und Gegenwart“, Kassel: Bärenreiter, I 613.

Giegling, Franz; Weinmann, Alexander; Sievers, Gerd

1964 „Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé

*Mozarts : nebst Angabe der verlorengegangenen, angefangenen, von fremder Hand bearbeiteten, zweifelhaften und unterschobenen Kompositionen*“, 6. Aufl., Leipzig u.a.: Breitkopf & Härtel.

ハンフリーズ、デイヴィッド (藤本一子訳)

1996 「歌とオーケストラのための作品」『モーツァルト大事典』海老澤敏監修, 東京: 平凡社, 245-249.

小泉洽

1970 「アリア」『新版 音楽辞典』東京: 東京堂出版, 34.

Konrad, Ulrich

2005 „Mozart-Verzeichnis“ Kassel u.z.: Bärenreiter.

Kunze, Stefan

1967 ‚Zum vorliegenden Band – Bestimmung und Gruppierung der Kompositionen‘ „Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenerwerke Werkgruppe 7: Arien, Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester“ 1. Bd., Kassel u.a.: Bärenreiter, VII~VIII.

Michels, Ulrich (角倉一朗訳)

1977 「20世紀/ベルク, ヴェーベルン」『カラー図解音楽事典』東京: 白水社, 493.

三澤寿喜

2002 「アリア」『新編 音楽中辞典』東京: 音楽之友社, 22-23.

森久美子

1987a 「モーツァルトの演奏会用アリア I」『名古屋女子大学紀要』33巻 199-207.

森久美子

1987b 「モーツァルトの演奏会用アリア II」『名古屋女子大学紀要』33巻 209-218.

長町順史

2013 『W.A.モーツァルト作曲のソプラノのためのコンサート・アリアー機会音楽としての存在意義についての考察ー』東京音楽大学2013年度修士論文.

Nauenburg, G

1835 ‚Arie‘ „Encyclopädie der gesamten musikalischen Wissenschaften, oder Universal-lexion der Tonkunst“, Stuttgart, Rep. 1974, Hildesheim u.a.: Georg Olms, I 261-264.

Rockstro, W.S.

1878 ‚Opera‘ „Grove’s Dictionary of music and musicians“ (1st.) London: Macmillan, Rep. 1990, Tokyo: Yushodo, II 511.

1927 ‚Aria‘ „Grove’s Dictionary of music and musicians“ (3rd.) London: Macmillan, 1927, Tokyo: Yushodo, I 111.

1954 ‚Aria‘ „Grove’s Dictionary of music and musicians“ (5th.) London: Macmillan, 1954, Tokyo: Yushodo, I 198.

津川圭一

1965 「アリア」『音楽事典』東京: 平凡社, I 57-58.

Verchaly, A.

1978 ‚Arie‘ „Das grosse Lexikon der Musik“, Freiburg i. Br. u.a.: Herder, I 100-101.

渡辺護

1966 「アリア」『標準音楽辞典』東京：音楽之友社, 34-35.

Weber

2001 ‚Concert‘ „*The New Grove Dictionary of Music and Musicians 2<sup>nd</sup> Ed.*“ London: Macmillan, VI225.

Westrup, Jack

1980 ‚Aria‘ „*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*“ London: Macmillan, I 573-579.

1992 ‚Aria‘ „*The New Grove Dictionary of Opera*“ London: Macmillan, I 169-177.

1993 「アリア」『ニューグロヴ世界音楽大事典』, 東京：講談社（樋口隆一訳）I 280-286.

2001 ‚Aria‘ „*The New Grove Dictionary of Music and Musicians 2<sup>nd</sup> Ed.*“ London: Macmillan, I 887-896.

吉田泰輔

1993 「コンサート・アリア」『モーツァルト全集 第15巻』海老澤敏監修, 東京：小学館 168-186.

ザスロー、ニール（松田聡訳）

2006 「コンサート・アリア 背景と概観」『モーツァルト全作品事典』森泰彦監訳, 東京：音楽之友社, 102.

著者不明

1979 「アリア」『音楽中辞典』東京：音楽之友社, 16.

著者不明

1996 「アリア」『オックスフォードオペラ大事典』東京：平凡社, 27-29.

著者不明

2004 「アリア」『新編 音楽小辞典』東京：音楽之友社, 9-10.

## 楽譜資料

Beyer, Franz

1999 „*Mozart Konzert-Arien für Sopran und Orchester*“ Leipzig u.a.: Breitkopf & Härtel

Kunze, Stefan

1967-72 „*Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie II: Bühnenerwerke Werkgruppe 7: Arien, Szenen, Ensembles und chöre mit Orchester*“ 4 Bde., Kassel u.a.: Bärenreiter.

Lehmann, Lilli

1921 „*Mozart Konzert-Arien: für eine Singstimme mit Orchester*“ Leipzig: C.F. Peters.

Schelhaas, Martin

1999 „*Das Arienbuch = The aria book : alto / Wolfgang Amadeus Mozart*“ Kassel u.a.: Bärenreiter.

Seedorf, Thomas

2013 „*Mozart Konzertarien für Sopran*“ Kassel u.a.: Bärenreiter.

録音資料

ドゥセイ, ナタリー(Dessay, Nathalie).

2009 『コンサート・アリア集 *Airs de concert / Mozart*』 (EMI Music Japan, EMI Classics TOCE-14273) .

Fleming, Renèe

1996 „*Mozart arias*”, (London: Decca UCCD-3566).

テ・カナワ, キリ(Te Kanawa, Kiri)

1984 『モーツァルト: ソプラノ・コンサート・アリア集 *Concert arias = Konzertarien = Airs de concert / Mozart*』 (ポリドール, London: 411 713-2 (F35L-50133)) .